

イスラエルとパレスチナ人たち

両者がともにパレスチナの地の全面的領有を歴史的権利として主張しているが、現実的にはそのいずれもが、重大な不正義をもたらすことなしに受け入れられることはありえない以上、オスロ合意の線に沿った領土分割——そのためにラビン「当時首相」が頑迷なユダヤ人によって暗殺をされたのだが——といった妥協が唯一の正しい解決策であることは明白である。

理想を言えば、われわれが呼びかけているものとは、善き隣人としての関係構築であるが、しかし頑迷なテロリストの排外主義者が数多く存在することを考えると、そうした関係は実現不可能である。

したがって解決は、取り返しのつかない深刻な損害を両方に与えかねない残忍な戦争といった最悪の事態を避けるために、不承不承であろうとも忍耐をするという線に沿ったところにしかありえない。

エルサレムについては、イスラエルの首都として維持されなければならないが、ムスリムの聖地としての権利はその境界線を越えて認められ、またアラブ人地区は国連によって、必要であれば力づくでもその地位が保障されなくてはならない。

アイザイア・バーリン

一九九七年一〇月一六日¹⁵

こうした主張内容そのものは、そのどれをとっても労働党やピース・ナウなどのシオニスト左派の主張としてありきたりのものであり、とくだん注目すべき点も見当たらないが（それよりもバーリンが自らの死の間際まで気にしていたという事実が重要であろう）、むしろだからこそバーリンらしい「現実主義」の表明であると言えよう。「オスロ合意」とは、一九九三年にイツハク・ラビンが首相として率いる労働党政権下で結ばれた、イスラエル政府とパレスチナ解放機構（PLO）の相互承認とパレスチナの暫定自治を段階的に進め、将来的には独立し二国家方式によって最終解決を図るという方向性の確認のことである。これに異を唱える右派（大イスラエル主義者）のユダヤ人によって、バーリンも記したように、のちにラビンは暗殺された（九五年一月四日）。またバーリンはこのなかで、一方ではエルサレムが、国際的には軍事占領地にほかならない東エルサレム（旧市街を中心にアラブ人居住地域がある）をも含めてイスラエルの首都であると言いつつ、他方ではイスラームの聖地やアラブ人地域への配慮を示した。つまり、エルサレムを含むイスラエルのユダヤ性を不可侵の一線として強固に主張しつつ（シオニズム）、同時に一定のパレスチナ側の権利を尊重してみせた（リベラリズム）、ということになる。この二面性こそ、バーリンならではのものであろう。

1-3 リベラル・ナショナリズム

この立場を思想と行動の双方で受け継ぎ体現しているイスラエルのユダヤ人研究者・活動家・政治

家に、ヤエル・タミールがいる。タミールの『リベラル・ナシヨナリズム』¹⁷と題された著書は、もともと留学先のイギリスでバーリンの指導下で書かれた学位論文であった。そしてタミールは、ピース・ナウの活動家でもあり、また労働党政権下（または連立内閣）で入閣したこともある。まさにバーリンの正嫡にふさわしい人物と言える。

『リベラル・ナシヨナリズム』の主眼は、端的にそのタイトルに表されており、現代の政治理論において相対立する概念であるとされているリベラリズム（個人の自由）とナシヨナリズム（共同体への帰属）を原理的に融合させることにある。その特徴は以下のようにまとめることができる。第一に、バーリンが自らの思想的特質ないし源泉として論及してきたリベラリズム（「二つの自由」のうちの「消極的自由」）とナシヨナリズム（「二つのナシヨナリズム」のうちの「文化的ナシヨナリズム」との両立・相互補完を理論的に説明したこと。第二に、バーリンが概念化するあるいは名づけることをしなかつたそうした融合に、「リベラル・ナシヨナリズム」という端的な名称を付与したこと。第三に、ピース・ナウでの活動経験もふまえて、こうした主張が現代イスラエル政治においてもつ意味についても積極的に論じたこと。この三点だ。

実のところ、師バーリンと同じように、タミールの主張も理論それ自体としては常識の範囲を超えるものではなく、またそもそも理論的な厳密さや限界的な可能性を追究したものではない。その点においてもタミールはバーリンに忠実であった。個人の自由意志と文化的共同体への帰属との両立に関する議論においては、たんに「健全なナシヨナリズム」が無条件に前提され、そこに消極的自由とい

う要素を付加するにとどまる。

これは理論的考察ないし論理的帰結だとはどうもいえず、そのことは、同書のイスラエルやシオニズムへの言及箇所において露呈している。ユダヤ人の民族的一体性とイスラエル国家のユダヤ性、つまりユダヤ・ナシヨナリズムについては、それ自体が攻撃的だったり排他的である可能性が省みられることがなく、せいぜい占領地（ヨルダン川西岸地区とガザ地区）におけるイスラエル軍の暴力を非難するにとどまる。どれだけ豊富な事例を世界史から引き出し、どれだけ多様な思想家のロジックを援用しても、シオニズムやナシヨナリズムそれ自体が問いに附されることだけはぜったいにない。逆にそれを文化的実体に基づく共同体への帰属意識として自明視したうえで、それに抵触しない範囲でリベラルな要素を持ち込もうとしているのだ。

アメリカのユダヤ人政治家思想家マイケル・ウォルツァーは、バーリンとシオニズムの関係を論じたときに、タミールのリベラル・ナシヨナリズム論に言及しつつ、バーリンを「リベラル・ナシヨナリスト」ではなく「リベラル・シオニスト」と呼んだ。¹⁸バーリンもタミールも使用していない名称であるはずだが、公然とピース・ナウの支持者であるウォルツァーにして、蓋し適切な表現であろう。¹⁹

ユダヤと イスラエルの あいだ

民族／国民のアポリア

近代世界における「国家」や「国民」や「民族」といったものを
理論的かつ歴史的に、根底から問い直そうと
試みたとき、必然的にヨーロッパ世界の「ユダヤ人問題」にぶつかり、
またその延長線上に生じたイスラエル建国という出来事について
考えざるをえなくなる

早尾貴紀

青土社